

食物には食べる人の名前が書いてある

金谷 美和

(かねたに みわ)

本館外来研究員

人生は
決まり
文句

ダナ・ダナを「ごちそう」に

「食物には食べる人の名前が書いてある」という言い回しを初めて聞いたのは、ある工場の親方の口からであった。わたしはインドのグジャラート州カッチ地方でイスラム教徒の染色職人集団の調査をしていた。その工房を主たる調査場所と決めて、毎日通ううち、親方の奥さんから、うちで食事をするように言われ、食事時に行かないと、どうして来ないの？と電話がかかってくるようになった。

ダナ・ダナとは、原義は芥子菜からしななどの種のこと、毎日の食事のことを意味する。カッチでは小麦粉あるいは雑穀粉をこねて薄く伸ばして焼いたマニとよばれるものが主食である。それに野菜や肉の入った汁気の多い煮物、ミルクの脂肪をとり除いて発酵させた飲み物を添える。

その家で毎日食事をするようになったある日、わたしは感謝の気持ちと遠慮を伝えるために、「毎日ごちそうになって、あなたにご迷惑をおかけして申し訳ありません」と言った。それは日本人らしい言い方だったかもしれない。それに対して親方は、「あなたは迷惑なんてかけていませんよ。だって、食物には食べる人の名前が書いてあると言っているんですか。この食物にはあなたの名前が書いてあるのです」とカッチ語による言い回しで答えてくれたのである。



結婚式のために遠方から来た客とともに朝食を囲む

土地に縛られない人生

最初、わたしはこの言い回しを、客に対する寛大さやもてなしを示すことばと理解していた。しかしそのうち、どうやらそれは違うらしいと思うようになった。また、このカッチ語の言い回しは、日本語による、先に「つばつけた」人に優先権がある、というような食物に対する所有や権利の概念とも違うようだと考えた。

なぜなら、この言い回しには、食物があるところには人は行く、という意味があることがわかってきたからだ。つまり、わたしがカッチにやって来たからカッチの食物を食しているのではなく、わたしの食べるべき食物がまずカッチにあり、その食物の存在に引かれてわたしの身体がカッチに移動してきたのだということだ。運命のよ

客のために大鍋で料理をする



うなものであるが、運命は人の身体に刻印されているのではなく、その人の食べる物に刻印されているという考え方である。

このような言い回しの背景にあるのは、おそらくカッチ人が移動することの多い人びとだということである。カッチは降水量が少なく、安定した農業収入を期待することができない。そのために、牧畜や、商業、手工芸が発達した。いずれも人が移動することになり立つ生業である。染色職人たちも、必要に応じて村から村へ、またカッチの外の世界へ、アラブ諸国や東アフリカへと移住をおこなってきた。

明日は、どこに行くか。そのような、土地に縛られない人生を示しているのがこのカッチ語の言い回しであり、フィールドワーカーとしてのわたしの人生にとっても、びつたりの決まり文句だと思っている。